

高温条件下における農作物等の技術対策

福島県農林水産部農業振興課

令和4年8月4日に仙台管区气象台から発表された1か月予報では、今後の気温が高く推移すると見込まれています。また、直近の2週間気温予報でも最高気温が30℃を超える真夏日が続く見込みです。

農作業時は熱中症対策など健康管理に十分注意するとともに、農作物の管理や家畜等の暑熱対策を徹底しましょう。

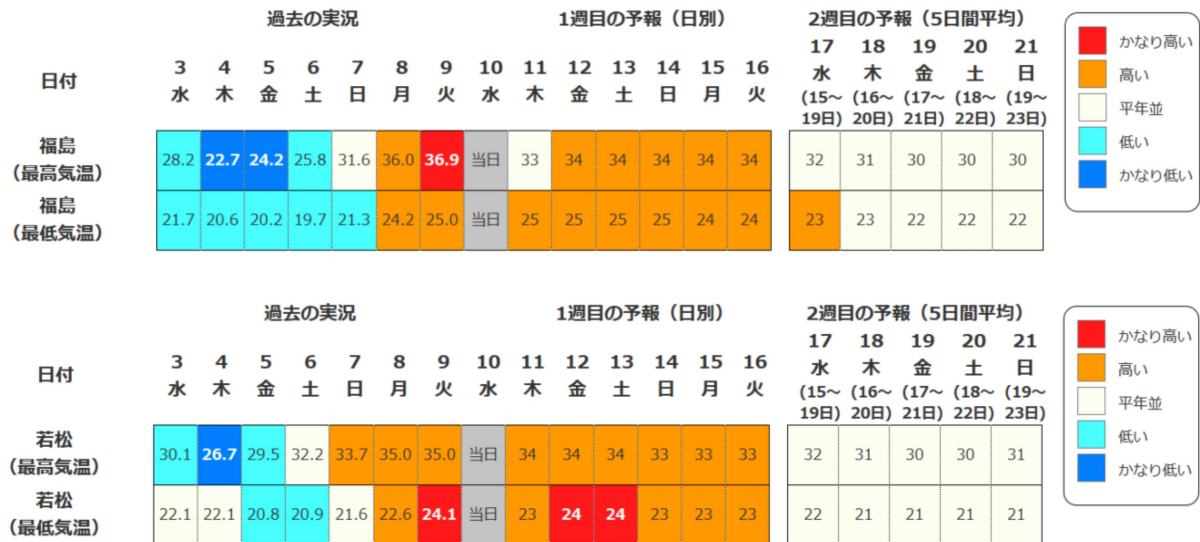
東北地方1か月予報

令和4年8月4日14時30分 仙台管区气象台 発表

向こう1か月の気温 平均気温は、高い確率 70%

- 1週目（8月6日から8月12日） 高い確率 70%
- 2週目（8月13日から8月19日） 高い確率 70%
- 3週目（8月20日から9月2日） 高い確率 50%

2週間気温予報（令和4年8月10日5時00分更新）



1 農作業時の留意点

高温条件下における農作業では、作業者の体調管理は十分注意しましょう。特に、気温が高くなると、熱中症をおこしやすくなるので注意が必要です。このため、作業者の健康管理に配慮し、作業環境の改善に努めましょう。

(1) 留意点

- ア 農作業はなるべく暑い時間帯を避けて行い、休憩を頻繁に取りましょう。
- イ 汗で失われる水分や塩分は、こまめに補給しましょう。

- ウ 通気性の良い作業衣や帽子を着用するなど、服装に注意しましょう。
- エ 簡易の移動性テントなどを使用し、なるべく日陰での作業ができるよう工夫しましょう。

(2) 応急処置

熱中症が疑われる症状が現われた場合は、応急処置として涼しい場所で身体を冷し、水分及び塩分の摂取等を行いましょ。また、速やかに医師の診察を受けるようにしましょ。

2 水 稲

出穂後異常高温に継続して遭遇すると不稔が発生したり、白未熟粒の多発により著しく品質が低下します。

このため、水管理の徹底による高温対策を行うことが必要です。

(1) 水管理の徹底

中干し終了から登熟期の水管理は間断かんがいとしますが、出穂開花時期は湛水状態を保つことが基本です。

登熟期間中に高温が続く場合は、飽水管理（ひたひた水状態）をおこなうことで水田の水温、地温を下げ、根の活力維持を図りましょ。

また、収穫作業に向け早期に落水することは乳白粒等の発生による品質低下の要因となるので、落水は出穂後30日以降を目安としましょ。

(2) 病虫害防除

ア いもち病

異常高温が続くと一時的に発生が抑制されますが、葉色が濃く窒素栄養が過剰な場合やいもち病の常発地帯では、穂いもちが発生する可能性があります。上位葉での発病を確認した場合は、直ちに散布剤により防除を行いましょ。

イ 斑点米カメムシ類

本年は、斑点米カメムシ類の発生が多くなっています。これからの畦畔の草刈りは行わず、乳熟期（出穂期後7～10日頃）とその7日後の2回の防除を行いましょ。

3 大 豆

(1) 干ばつ対策

大豆は要水量の多い作物で、開花期から子実肥大初期にかけて土壌が乾燥すると落花、落莢が多くなり減収します。このため、乾燥が続く土壌が白化したり、葉の裏返りや葉巻が観察される場合は、暗きよを閉じてほ場周囲の明きよや畦間にかん水しましょ。

かん水は、夕方に2時間程度を目安に行いましょ。なお、かん水は一度に行わず、数回に分けて徐々にほ場全体に水が行き渡るようにしましょ。

(2) 病虫害防除

高温年にはカメムシ類やダイズサヤタマバエの多発生が予想されますので、着莢期（8月中旬）から子実肥大盛期に10日間隔で2～3回防除を行いましょ。また、紫斑病対策としては、開花期後20～40日間で1～2回防除を行いましょ。

4 野 菜

(1) 施設栽培での高温対策

側面と妻面を解放して換気を図りましょ。きゅうり、トマト等において高温によ

る生長点の萎れが見られる場合は、日中の暑い時間帯に遮光、遮熱資材でハウスを覆いましょう。

(2) かん水

かん水は、朝夕の気温が低い時間に行いましょう。かん水チューブを用いた少量多回数が望ましい方法です。なお、畦間かん水を行う場合は、長時間水をためないように注意しましょう。

(3) 敷きわら等

露地栽培では、通路等への敷きわら等を厚くし、地温上昇と乾燥を防止しましょう。

(4) 草勢の維持

きゅうり、トマト、さやいんげん等の果菜類やマメ類は、不良果や不良莢を早めに摘み取り、株への負担を軽減し草勢維持に努めましょう。また、老化葉の摘葉を行いましょう。

追肥は、液肥やペースト肥料の土壌かん注を行うとともに、葉面散布を併用しましょう。

(5) 生理障害対策

トマトやピーマンの尻腐れ果対策として、かん水による土壌水分保持に努めるとともに、カルシウム剤の葉面散布を行いましょう。

(6) 病虫害防除

かん水後は一時的に作物の周辺が多湿となり、きゅうりの炭そ病や褐斑病、トマトの葉かび病等の病害が発生しやすくなります。また、乾燥時はハダニ類等害虫類の発生が多くなりますので、農薬の使用基準を遵守して適期防除を行いましょう。

(7) 収穫物の鮮度保持

きゅうりでは、フケ果（ス入り果・先膨れ果）の発生が懸念されます。収穫物を直射日光に当てない等、品温の上昇を防ぎましょう。また、鮮度パックの使用等により品質保持を心がけましょう。

5 果 樹

夏期の高温・乾燥条件下では、樹体や土壌からの蒸発散量が増え、果実の肥大不良や樹勢低下、果実や枝幹部の日焼けなど様々な障害が発生しやすくなります。特に、梅雨明け直後は、根の機能が低下しているため注意が必要です。かん水や、草刈り・マルチ等の実施により、土壌の水管理を徹底しましょう。

(1) かん水

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施します。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいため、かん水が必要な場合は早めに実施しましょう。

(2) 草刈り、マルチ

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合は、草刈りしない場合の約半分とされています）。

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(3) 新梢管理

徒長枝などの不要な枝はせん除して、水分の消耗を防いでください。ただし、過度のせん除は樹勢低下を招くため、切りすぎないように注意しましょう。

主枝や亜主枝の背面に発生した徒長枝や発育枝は、強い枝を中心に除去し、日焼け防止等のため、弱めの枝を適当な間隔で配置します。なお、もも等では基部葉を残してせん除しましょう。

(4) 適期収穫

収穫前から収穫期に高温・乾燥条件で経過する場合は、果実の成熟に影響が大きいため、果実の着色、地色の抜けや果肉の軟化等の成熟状況に注意し、適期収穫を徹底しましょう。

また、収穫時の果実温が高いと果実が軟化しやすい傾向にあるため、収穫は気温が低い時間帯に行い、収穫後は涼しい場所に保管しましょう。

(5) 病虫害防除

高温下においては害虫の世代交代が早まり、増殖が助長される傾向にあります。特に、ハダニ類が急激に増加しやすいため、発生密度を観察し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）になったら速やかに防除を行いましょう。

なお、主要害虫の防除に当たっては、発生予察情報を参考にしてください。

6 花 き

(1) 施設栽培の温度管理

施設栽培では高温障害回避のため側面と妻面をできる限り解放して風通しを良くしましょう。また、日中の暑い時間帯は遮光資材で遮光し、施設内温度や植物体温の低下に努めましょう。

(2) かん水

キク、リンドウ等の露地栽培では、畦間かん水等を定期的 to 実施しましょう。畦間かん水を行う際、長時間水をためないように注意しましょう。

なお、かん水は日中の高温時を避け、夕方から朝にかけての涼しい時間帯を利用して行いましょう。

ただし、過湿にならないよう注意しましょう。

(3) 遮光

リンドウでは高温や強日射による開花遅延や花卉焼け等が懸念されるので、寒冷紗や遮光資材が利用できる場合は、30～50%程度の遮光を行ない、開花の遅れや品質低下を防止しましょう。

また、これから育苗時期にあたるストック等では、高温による蒸れや徒長が懸念されるので、遮光資材の利用や施設内の換気を実施して、良質苗生産に努めましょう。

(4) マルチ等

敷きわらや白黒ダブルマルチの積極的な活用によって、地温上昇や土壌乾燥を防ぎましょう。

(5) 葉面散布

高温期は、カルシウム欠乏による葉先枯れ症状（トルコギキョウ、リンドウ、ユリ等）や鉄欠乏による葉色の退色（ユリ、バラ等）といった生理障害が生じやすくなります。生育状況に応じて葉面散布剤を散布し、養分補給を行いましょう。

(6) 病虫害防除

アブラムシ類、ハダニ類等は、高温乾燥条件で発生しやすくなります。発生状況をこまめに把握するとともに、適期防除に努めましょう。

7 飼料作物

牧草は盛夏期の高温・少雨の環境下では生育が滞り気味になりますので、刈り取りは適正な間隔をおいて実施し、秋期の草量確保のため、2番草刈り取り後の追肥は、肥効が確保できるよう盛夏期を過ぎた後に行いましょう。

8 家畜・家禽の暑熱対策

夏期の高温環境下では、家畜は体温上昇を防ぐために呼吸数や血流を増加させ、エネルギーを余分に消費する一方で飼料摂取量が減少するために生産性が低下します。家畜の体温上昇抑制のため暑熱対策を徹底しましょう。

また、家畜の姿勢、採食量や反芻行動など家畜の行動をよく観察し、異常家畜の早期発見・早期治療に努めましょう。

(1) 畜舎内の飼養環境の改善

ア 畜舎の窓・扉を開放し、換気扇、送風機により送風、通風促進を図りましょう。

また、畜舎入り口やダクトファンの前方に細霧装置による噴霧や、直接床に散水することにより、畜舎内の体感温度を下げるよう工夫しましょう。

イ 扇風機やダクトファンにより、家畜に直接風を当て、家畜の体感温度の低下に努めましょう(牛に風速2m/秒の風を当てると体感温度を約8℃下げる効果があります)。

また、飼養密度を下げることも、家畜の体感温度の低下に効果があります。

ウ 寒冷紗等を利用して畜舎内への直射日光を遮光し、畜舎内の温度上昇を防ぎましょう。

エ 畜舎内を清潔に保ちましょう(アンモニアの発生や高温多湿とならないよう、除糞、敷料の交換をこまめに行います)。

オ 家畜をよく観察し、特に暑熱のダメージが大きい家畜については、畜体へ直接水をかけるなどの応急措置を行いましょう。

(2) 飲水及び飼料の管理

ア 新鮮な水を十分に飲水できるよう、給水施設を清潔に保ちましょう。

また、バルククーラーなどを活用し冷却水を与えるなどの工夫をしましょう。

イ 牛は採食すると、ルーメン発酵による熱が発生します。質の劣る飼料はルーメン内の発酵熱を高めるため、良質な飼料を給与しましょう。

また、早朝及び夜間などの涼しい時間帯での給与や、飼料回数を増やすなどの工夫をしましょう。

ウ 高温時は、発汗等により無機質の要求量が増えるので、体内代謝を正常にするためにも固形塩や主要ミネラル類をやや多めに補給しましょう。

エ 夏期は食べ残した飼料が飼槽内で変敗しやすく、また変敗した飼料からハエ等の衛生害虫が発生することがあります。このため、食べ残した飼料は早期に片付け、飼槽は清潔に保ちましょう。

また、給与前の飼料は湿気が少ない冷暗所で保管し変質を防ぎましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 TEL 0 2 4 (5 2 1) 7 3 4 4

○農業振興課ホームページ

以下のURLより他の農業技術情報(生育情報、気象災害対策、果樹情報、特別情報)をご覧ください。

URL：<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>